

ルカによる福音書20章17-18節 「家の建てる者たちの捨てた石」

1A 家を建てる者たち

1B 先の者たち

1C カイン

2C イシュマエル

3C サウル

2B イスラエルの子ら

1C ヨセフの兄たち

2C イスラエル人たち

3C 祭司たちや預言者たち

2A 要の石

1B 賢明なご計画

2B 復活の力

3B 苦しみにある栄光

4B 裁きの量り

本文

ルカによる福音書 20 章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、19 章まで来ましたが、今日は 20 章です。午後に一節ずつ読んでいきますが、今朝は、17-18 節に注目したいと思えます。「17 イエスは彼らを見つめて言われた。「では、『家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった』と書いてあるのは、どういうことなのですか。18 だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。」」

私たちは前回、イエス様がエルサレムに入城されたところを見ました。ろばの子に乗って来られましたね。弟子たちは叫びました、「19:38 祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。」これは、詩篇 118 篇にある言葉で、メシアがエルサレムに来られたのを、王としてお迎えする時に叫ぶ歌であり、弟子たちはまさにイエス様がそれであるとして叫んだのです。

1A 家を建てる者たち

そして、イエス様は宮の中に入られて、そこで商売をしている人々を追い出したりして、宮清めを行われたところを読みました。そこで午後にじっくり見て行きますが、神殿を管理している祭司長たち、またその他の宗教指導者らがやって来て、「20:2 何の権威によって、これらのことをしているのか」と尋問しました。そこでイエス様は、喩えを語られたのです。それは、ぶどう園の喩えで、ぶどう園はイスラエルのことを表し、主人は神ご自身、そして農夫が、イスラエルの家を治める指導者たちのことです。その主人は収穫の分け前をえようと僕を遣わすのですが、なんと農夫たち

は、しもべを打ちたたき、辱めた上で送り返しました。これらは、神からの預言者たちのことを表していました。預言者たちを迫害したのは、実にイスラエルを神に導くために任じられていたはずの、指導者たちだったのです。そして、主人は、息子であれば敬ってくれるだろうとして、息子を遣わしたところ、なんと、「20:14 あれは跡取りだ。あれを殺してしまおう。」として殺してしまうのです。これは、神の預言者以上の存在、神ご自身の子、キリストを神が遣わされたのに、指導者らはその子が受け継ぐ神の分け前を貪り、彼を殺してしまいます。

それで、イエス様の喩えは、こう続くのです。「20:16 主人はやって来て農夫たちを殺し、ぶどう園を他の人たちに与えるでしょう。」農夫たちに対する裁きが下ります。このことを民が、「そんなことが起こってはなりません。」と叫びます。そうですね、これほど矛盾に満ちた現実はありません。主に立てられたはずの指導者たち、人々を主に導くはずの指導者たちが、主ご自身を殺してしまうのですから、それで裁かれてしまうのですから。あってはならないことです。けれども、そこでイエス様が詩篇 118 篇を引用されるのです。「家を建てる者たちが捨てた石、それが要の石となった」先ほど、エルサレムにイエス様が入城される時に、人々が叫んだのが、「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。」でありましたが、それは詩篇 118 篇 26 節に書いてあります。その手前、22 節に、この言葉があるのです。そして 23 節には、「これは主がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。」とあり、これが主によるもので、だから不思議なことだと言っているのです。

1B 先の者たち

なぜ、家を建てる者たちが、神ご自身、キリストご自身を捨ててしまうようなことをしてしまったのか？を考え、祈り、思い巡らしたいと思います。農夫たちが、主人のしもべを拒み、そして主人の息子を拒み、殺したのはひとえに、「ぶどう園は自分のものだ」と思ってしまったことです。農夫は、飽くまでも主人から任されただけであり、そこを管理しているだけなのに、あたかも自分が所有者であるかのように錯覚したことです。ここには、神がおられ、その神の恵みによって、自分に神の畑を管理する恵みと喜びがあるのに、いつの間にか自分がその畑の主だと思ってしまうのです。

これをどう言ったらよいでしょうか、「御霊によって始まったのに、肉によって完成しようとしている」と言ったらよいでしょう。パウロが、恵みから落ちてしまったガラテヤの信者たちに、こう言いました。「3:3 御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。」私たちが救われたのは、もっぱら神の恵みによってです。自分によって与えられたものは何一つありません。救われるのは、自分自身から出たものではなく、神の賜物です。義と認められたのは、自分は全くの罪人で、滅ばなければ絶対に行けないものだったのに、それなのに、キリストの義が贈り物のようにして与えられ、信じられない事ですが、神は私をキリストにあって、罪を犯したことの無いようにみなされるのです。そして聖められることも、キリストを信じる信仰によって与えられるのであり、自分自身で聖めることなど、何一つできません。ですから、自分はすべて受け取ったものばかりであり、受け取っていないものは何一つないのです。ですから、今も、神を信じ、キリストを信じるということによってのみ生きることができ、そこに御霊が働き、私たちを導いてくださいます。そ

れなのに、いつの間にか、自分自身のものであるかのようにみなして、それで神の家をやりくりしようと考えてしまうのです。それが肉であり、御霊によって始まったのに、いつの間にか肉によって完成させようとしてしまいます。

その肉の中にいる者たちの中に、神の世界が、神の恵みが入ると、肉にある者たちが御霊の者たちを迫害するようになります。神の恵みによるのですが、自分の肉が全く役に立たない、神の前では全く認められないことを、否が応でも光に照らされるように見せられてしまうからです。

1C カイン

聖書では、長子の権利というものがありますが、初めに生まれた男子が、父からのものの二倍の分け前を受けとります。つまり、長子が父のものを受け継ぎます。ところが、兄が弟を殺すというところから、聖書の話は始まります。そうです、カインが弟アベルを殺した話です。カインは、自分が大地で耕した実りを主に捧げたら、主は目を留められませんでした。アベルは、羊の初子の中から、肥えたものを捧げました。それを主は目に留められました。主はアダムに対して、土地から出て来るものは呪われていると言ひ、また皮の衣によって彼とエバの恥ずかしい部分を隠し、罪からくる恥を覆ってくださったのですが、アベルはそれを信仰をもって受け入れました。カインは、自分のやっていることを神の前で認めてもらおうとしました。それで、受け入れられなかったのです。神は、ご自身に近づく方法をあらかじめ教えておられたのに、神ではなく、自分のやり方で近づこうとしたのです。神の陣地をわが物のようにして振る舞ったのです。

2C イシュマエル

次に肉なる者として思い出すのは、アブラハムの兄息子イシュマエルのことです。妻サラが、不妊であるので、神からの約束を果たすために、女奴隷ハガルをアブラハムに与えました。彼女によって生まれたのがイシュマエルです。ところが、神はサラから生まれる者が、アブラハムの約束の子になるということで、なんと彼が百歳の時、サラが九十歳の時にイサクが生まれました。イサクが乳離れする祝いをしていた時に、イシュマエルはイサクをからかっていました。そこに神の全能の力が、神の恵みの力がイサクに働いているのを見て、妬んだのでしょう。主は、後に、イシュマエルではなく、イサクのみをアブラハムの子とみなし、「あなたの愛する独り子」とアブラハムに言われるのです。これもまた、先に出てきた者が後の者を迫害する一例です。

聖地旅行において、ベツレヘムに入りましたら、パレスチナ人のガイドさんが入って来てくださいました。ベツレヘムにおけるパレスチナ人ガイドは、多くが正教会やカトリックの人ですが、彼はなんと、福音派の聖書学校を出ていました。興味深かったのは、誰かが「ムスリムから嫌がらせは受けられないのですか？」と尋ねた時です。受けないとは言っていませんでしたが、共存しているとのこと。けれども、家族が、正教会のメンバーで、自分だけがクリスチャンになったので、家族からの圧迫が強い、ということなのです。伝統的なキリスト教徒たちの中に、本気でイエス様を信じて、御霊によって新しく生まれた人は煙たい存在なのです。

3C サウル

そして聖書に戻ると、王国時代に入って、サウルがいます。彼は人によって選ばれた王でしたが、神によってダビデが選ばれ、油注がれます。けれども、サウルは王位に着いています。ダビデはゴリヤテを倒し、サウルに部下として重用されますが、ダビデのほうがりシテ人をサウルよりも倒しているという歌を聞いて、彼は脅威を感じて、なんとダビデを殺そうとします。彼を殺そうとして捜しまわる話が、サムエル記第一の後半になっています。これもまた、サウルは神の家をわが物だと思っていたところ、神の恵みの選びによって、ダビデが立てられているものですから、自分のものにできないということで、ダビデを迫害しました。

2B イスラエルの子ら

1C ヨセフの兄たち

このような個々人のみならず、イスラエル人が全体的に、神に選ばれた者を拒むということが起こります。ヨセフのことを思い出してください、ヤコブが寵愛して、彼に長服を与えた所、兄が妬みました。おまけにヨセフは夢を見て、兄たちが自分にひれ伏すであるとか、父や母も含めてひれ伏すであるとか、とんでもない夢を見たことを話したので、兄たちは妬みから憎しみに発展し、ヨセフを穴の中に入れて、そこから引き出して、エジプトに行く商人たちに奴隷として売り払ったのです。ところが、主はヨセフと共におられました。彼は奴隷であったけれども、主と共におられて、監獄に入るという苦しみを経ましたが、ファラオに仕えるエジプトの総理大臣になったのです。そして、夢のとおり、兄たちがヨセフの前にひれ伏すということが現実のものとなりました。つまり、イスラエルの人たちは、神に選ばれた者を初めは拒みましたが、二回目は、受け入れたのです。

2C イスラエル人たち

同じようにモーセも、初めは拒まれ、次に受け入れられました。40歳の時に、イスラエル人の苦しみを見て、彼らを助けようと思ったところ、なんとイスラエル人たちから、逆に疑われて、エジプトを逃げなければいけなくなったのです。ところが80歳の時に神に呼ばれて、エジプトに戻ると、彼らはモーセを預言者として受け入れ、それでイスラエルはエジプトから救い出されたのです。こうやって、イスラエルを救うために来たのに、その救う方を拒むということが、キリストご自身に起こったのです。ユダヤ人指導者が仕向けて、それで十字架に付けられましたが、再び来られる時は、彼らは悔い改めて、主を受け入れ、信じるのです。

3C 祭司たちや預言者たち

預言者たちは、生々しい迫害を受けています。エレミヤに対して、祭司たちや預言者たちが、急先鋒になって迫害していました。「エレ 20:1-2 さて、【主】の宮のつかさ、また監督者である、イメルの子、祭司パシュフルは、エレミヤがこれらのことばを預言するのを聞いた。パシュフルは、預言者エレミヤを打ち、彼を【主】の宮にある、上のベニヤミンの門にある足かせにつないだ。」こうやって、主の家を治めているはずの祭司たち、また主の言葉を任されているはずの預言者たちが、主ご自身の預言者を取り除こうとするのです。

ですから、私たちは、主から与えられたものを当たり前のもとしてはいけないのです。これは、心の油断をすると、必ず陥る罪です。卑近な例を取ってみましょう、例えば私たちは、ここで神の恵みによって場所が与えられています。家賃も払っています。けれども、思い出さないといけないのは、すぐ隣には人が住んでいます。上の階にも人が住んでおり、下の階にもお店があります。そういった方々の善意や好意もあって、初めて私たちはここで安心して礼拝を献げることができていますね。その善意や好意も、主から来たものです。そして、私たちがキリスト者として、信仰そのものが与えられていること、そして尊い友が、兄弟姉妹が与えられていること、これらは当たり前のことだとして、自分のしていること、言っていることが否定されたとして怒ったらどうでしょうか？自分のしている奉仕があって、それをやめるような時、あるいは変更が迫られる時に、怒ったり、妬んだり、落ち込んだりしたらどうでしょうか？そもそも、それは神の恵みによって与えられていたわけで、恵みによって救われた者として喜んで神に仕えているのであって、既得権はないのです。

2A 礎の石

そのようなことで、神の家を建てる者たちが、彼らの主であるキリストご自身を捨ててしまうという、人類の歴史における最大の皮肉、矛盾を犯してしまいましたが、そんなことをも神にとっては織り込み済みで、神はこれをもって永遠の救いの礎にしたのです。「それが要の石となった」とあります。建物において、要の石とは、そこを外せば、建物全体が崩れるという要になっている石です。大抵、隅の下の部分にある石がそれに当たります。アーチであれば、アーチの真ん中の石を外すと、すべてアーチが崩れます。そこを要石と言いますが、捨てられた石が要石となるというのです。これが、人間が思いもつかなかった不思議なことだということです。

1B 賢明なご計画

それは第一に、神が、彼らが肝心の救い主を拒むということ、全ての人の罪の供え物として定め、永遠の救いとして定めておられたということです。「Iヨハ 2:2 この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥めのささげ物です。」これは神の知恵によるものであり、だれも思いつきもしなかったことだとパウロは論じています。「Iコリ 2:7-9 私たちは、奥義のうちにある、隠された神の知恵を語るのであって、その知恵は、神が私たちの栄光のために、世界の始まる前から定めておられたものです。この知恵を、この世の支配者たちは、だれ一人知りませんでした。もし知っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。しかし、このことは、「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、人の心に思い浮かんだことがないものを、神は、神を愛する者たちに備えてくださった」と書いてあるとおりでした。」

2B 復活の力

そして、「それが要の石となった」とあるのは、この方が捨てられて終わりになるのではなく、生きて、要となる、神の家の生きた石となるということを意味します。イエス様が、殺されたのに、それでも生き返り、今でも生きていることを表しています。ペテロは、ユダヤ人たちの前でこのように、真っ直ぐに語りました。「使 2:23-24 神が定めた計画と神の予知によって引き渡されたこのイエス

を、あなたがたは律法を持たない人々の手によって十字架につけて殺したのです。しかし神は、イエスを死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、あり得なかったからです。」

このようにして、死んだのに生き返った方を私たちは宣べ伝えることによって、人々が、「この人は自分には関係のない人物だ」ではなく、まさに自分の生死、永遠のいのちか滅びかを定める方なのだということを知ります。「使 17:30-31 神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

3B 苦しみにある栄光

そして、イエス・キリストにつく者は、キリストが苦しまれて、その後に栄光に入られたように、自分たちも義のゆえに苦しみを受けるのであれば、それは恥ずかしいことではなく、光栄なことなのだということを知る必要があります。「I ペテ 4:12-14 愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間で燃えさかる試練を、何か思いがけないことが起こったかのように、不審に思っただけではありません。むしろ、キリストの苦難にあずかればあずかるほど、いっそう喜びなさい。キリストの栄光が現れるときにも、歓喜にあふれて喜ぶためです。もしキリストの名のためにののしられるなら、あなたがたは幸いです。栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。」キリストを信じているがゆえに、いろいろな不都合や試練、時に迫害も受けるでしょう。けれども、その時は、「捨てられたけれども、要石になった」というキリストを思い起こしてください。神の栄光が、その苦しみの中に留まっているのです。

4B 裁きの量り

最後に、イエス様は、ご自身を捨てたことによって、その同じ石が自分自身に当たって砕けることを彼らに語られました。「**だれでもこの石の上に落ちれば、粉々に砕かれ、またこの石が人の上に落ちれば、その人を押しつぶします。**」粉々に砕かれるのは、十字架に付けられたキリストを仰ぎ見る時です。自分の罪がそこに置かれているのだという悟りが与えられ、心が砕かれます。そして、その石が自分の落ちるとするのは、悔い改めず心を頑なにしているならば、押しつぶされるのだということです。その基準もまた、「あなたは、最後の罪の赦しの備えを拒んだ」ということによつて裁かれるのです。

このようにして、神の家は建てられていきます。自分たちでやっぴいこうとする世界に全ての人は生きています。けれども、そこでは捨てられた石が、要石となり、私たちの教会が、この方を要石とした生ける神の家となっているのです。そこは、苦しみがありません。試練がありません。みな、信仰が試されています。けれども、そこに復活の力が働き、キリストの栄光の御霊が留まります。